

Title	近世ロンドンの職業構造
Sub Title	The occupational structure in early modern London
Author	酒田, 利夫
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1997
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.90, No.3 (1997. 10) ,p.559(91)- 580(112)
JaLC DOI	10.14991/001.19971001-0091
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19971001-0091

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

近世ロンドンの職業構造

酒田利夫

はじめに

近世ロンドンの急速な発展は、世界史上においても極めてユニークな発展であり、近年活発な研究の対象となり、英国における都市史研究のひとつの中心的な領域となっている。筆者は、すでに最近の注目される研究を用いて、その人口、経済および社会的側面について若干の考察を試みたが、⁽¹⁾本稿は、近世ロンドンの職業構造について、より詳細な考察を加えることを目的とする。

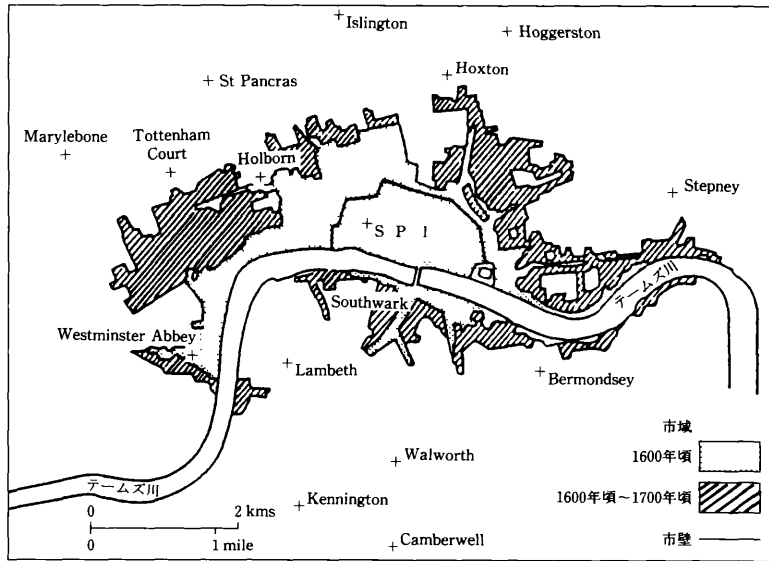
表1 ロンドン各地域およびミドルセックスの人口 1560～1800年⁽²⁾

(単位千人)

年度	シティ	東部 郊外	北部 郊外	西部 郊外	南部 郊外	郊外 計	ロンドン	ミドルセッ クス農村部
1560	80	10	5	5	10	30	110	25
1600	100	30	20	10	25	85	185	30
1640	135	90	50	35	45	220	355	40
1680	105	140	60	65	65	330	435	50
増加率（1560年を100とする）								
1560	100	100	100	100	100	100	100	100
1600	125	300	400	200	250	285	170	120
1640	170	900	1,000	700	450	735	325	160
1680	130	1,400	1,200	1,300	650	1,100	395	200
ロンドン人口に占める比率（%）								
1560	73	9	4.5	4.5	9	27	100	
1600	54	16	11	5.5	13.5	46	100	
1640	38	25	14	10	13	62	100	
1680	24	32	14	15	15	76	100	

(1) 酒田 (1992b/94) ; (1993b/94) ; (1996)。尚、近年進展著しいロンドン史研究については、この他、Harding (1995)、酒田 (1992a/94) および坂巻 (1996) を参照。

(2) Finlay&Shearer (1986), p. 45, Table 3 ; 酒田 (1992b/94), 148頁, 表7-2。



(3)
図1 ロンドンの市域

はじめに、筆者がこれまでに行ってきた近世ロンドンの人口と経済に関する研究のサーヴェイにおいて、当該期ロンドンの職業構造の考察のうえで極めて重要と思われる発見事実と論点を、繁を厭わず繰り返し指摘しておきたい。

まず、近世ロンドンにおける急速な人口の増加について、以下の3つの事実を確認しておきたい。すなわち、第1に、1550年-1700年の150年間にイングランドの人口が301万人から506万人へと増加したなかで、特にロンドンの人口増加は著しく、表1に示されるように、1560-1680年の120年間に11万人から43万5千人へと約4倍もの増加を示したこと。第2に、特にロンドン市郊外における人口増加はさらに著しく、同120年間に3万人から33万人へと実に11倍もの増加を示したのに対して、ロンドン市内、すなわちシティの人口は、8万人から10万5千人へと僅かな増加にとどまり、とりわけ1640-80年間には13万5千人から10万5千人へと注目すべき減少を示したこと。第3に、かくして当該期のロンドンは、図1に示されるように、物理的にも大きく拡大したのであり、特に17世紀における東部および西部郊外の発展は極めて著しいものであったこと、以上である。⁽⁴⁾

次に、近世ロンドンのイギリス経済発展に果たした役割について、やはり以下の3点について確認しておきたい。すなわち、まず第1に、その発展が農村の発展に寄生するものとの従来の一般的理解に対して、フィッシャーおよびグリイが、消費中心地としての成長促進的役割を評価する有力な主張を行っていること。第2に、さらにバイヤーが、消費中心地としてのみならず、生産中心

(3) Finlay (1981), p. 58, Figure 3.4; 酒田 (1992b/94), 47頁, 図7-2。但し、原図にあるブラックフライア橋は、1760-99年に初めて架けられたものであり、削除した。

(4) 酒田 (1992b/94)。

(5)
表2 ロンドンにおける製造業と商業

(%)

期 間	職 業	市 壁 内	市 壁 外	全 教 区 ^b
1540-1600年	工 業	52.9	70.1	58.4
	商 業	28.2	7.5	21.6
	そ の 他 ^c	18.9	22.4	20.0
	計	100.0 (n=1,277)	100.0 (n=1,472)	100.0
1601-1700年	工 業	40.4	74.3	60.6
	商 業	35.9	12.6	22.0
	そ の 他 ^c	23.7	13.1	17.4
	計	100.0 (n=2,660)	100.0 (n=12,742)	100.0

註 (a) 職業の判明する者のみの比率である。

(b) 全教区の比率は、市壁外および市壁内の人口比率の変化を考慮して加重修正されている。

(c) その他には、主として流通・運輸業、サービス業、専門職および官職が含まれる。

地としての役割を強調する注目すべき主張を行っていること。第3に、この点に関して、表2が示すように、生産の中心地としては郊外の重要性(シティはむしろ商業中心地として重要)を指摘しうるのであり、その傾向は17世紀に一層深まること、以上である。⁽⁶⁾

かくして以上からは、近世におけるロンドン市郊外の発展とその重要性が注目されるのであるが、郊外においても、東部、西部、南部および北部郊外の各地域が各々独自の発展を示すと同時に、その役割もまた多様であったと思われるのであり、本稿は、これらの点を、シティならびに各郊外地域における職業構造を明らかにすることによって、解明せんと試みるものである。その際、まずはイギリスにおけるこれまでの研究成果を出来るだけ利用しつつ、筆者の史料分析で出来るだけ補いたい。

II

i まず、17世紀後半におけるシティの職業構造については、リヴァプール大学の M. J. パウアー博士が1666年の炉税報告書(Hearth Tax Returns)を用いて行った分析によって明らかとなる。当該報告書から作成された表3は、むしろ職業と富の関係を明らかにすることを目的にしているが、同

(5) Beier (1986), p. 150, Table 14; 酒田 (1993b/94), 174頁, 表8-2。

(6) 酒田 (1993b/94)。

(7)
表3 1666年のロンドンにおける職業と居住規模

(20教区)

		戸数	平均炉数			戸数	平均炉数
商品ないしサービス販売業				工業			
1. 商業従事者 (Dealers)				1. 木工業 (Wood)			
本屋 (Bookseller)	25	4.5	榎屋 (Cooper)	43	4.6		
仲買人 (Broker)	18	4.6	指物師 (Joiner)	26	3.8		
蠟燭商 (Chandler)	24	4.6	計	94	4.3		
呉服商 (Draper)	21	6.8	2. 金属加工業 (Metal)				
食料品商 (Grocer)	18	5.4	金細工師 (Goldsmith)	79	4.3		
小間物商 (Haberdasher)	43	5.3	白蠟細工師 (Pewterer)	13	4.8		
商人 (Merchant)	125	8.0	蹄鉄工 (Smith)	22	3.4		
セールスマン (Salesman)	11	3.6	針金製造工 (Wiredrawer)	19	4.8		
毛皮屋 (Skinner)	23	5.3	計	194	4.2		
計	381	6.4	3. 織物・衣類製造業 (Textiles)				
2. 食料品業者 (Victuallers)				毛織物仕上工 (Clothworker)	22	4.5	
居酒屋 (Alehousekeeper)	44	5.4	靴下屋 (Hosier)	17	4.8		
パン屋 (Baker)	18	5.4	反物師 (Hot presser)	18	4.7		
チーズ商 (Cheesemonger)	10	4.4	婦人帽子屋 (Milliner)	15	4.7		
菓子屋 (Confectioner)	11	5.4	裁縫師 (Sempster)	12	4.2		
料理師 (Cook)	18	5.8	絹織布工 (Silkman)	48	5.1		
魚商 (Fishmonger)	23	3.9	仕立屋 (Tailor)	113	3.7		
煙草屋 (Tobacconist)	26	4.8	計	286	4.2		
食料品商 (Victualler)	71	5.2	4. 皮革工業 (Leather)				
葡萄酒商 (Vintner)	22	11.9	製靴工 (Shoemaker)	58	3.2		
計	306	5.7	計	80	3.2		
3. 専門職 (Professions)				5. 雑工業 (Miscellaneous)			
薬種商 (Apothecary)	25	5.9	宝石商 (Jeweller)	12	3.6		
理髪師 (Barber)	24	3.8	家具屋 (Upholsterer)	18	5.3		
医師 (Doctor)	12	8.3	計	95	4.6		
薬屋 (Druggist)	27	6.4	半熟練職				
聖職者 (Rector)	20	6.6	1. 建築業者 (Builders)				
公証人 (Scrivener)	21	5.5	煉瓦積工 (Bricklayer)	21	3.6		
計	176	5.7	大工 (Carpenter)	19	3.2		
				ガラス屋 (Glazier)	15	3.5	
				左官 (Plasterer)	18	3.9	
				計	89	3.5	
				2. 運送業者 (Carriers)			
				荷担ぎ (Porter)	34	2.3	
				計	64	3.2	

註 (a) 計には各分類に入るすべての者が含まれている。但し、職業名は10名以上の職業のみが挙げられている。

(7) Power (1986), pp. 214-5, Table 27.

表からシティの職業構造の主要な特徴として、以下の3点を指摘できよう。⁽⁸⁾

すなわち、まず第1に、商品ないしサービスの第一次的な販売業として、商業従事者、食料品業者、専門職が大半を占めていること。第2に、工業について、金細工師に代表される奢侈の商品の生産者が目立ち、織物・皮革関係が少ないが、織物についても、他の繊維労働者よりは豊かな人びとであった高級品の絹織物工や毛織物仕上工が多かったこと。第3に、半熟練職種というべき、通いの仕事であった建築業者と運送業者は相対的に少ないこと、以上である。⁽⁹⁾

こうした特徴は、記載の多い職業を上位13職まで示した表4に端的に示されているといえよう。すなわち、上位13職中、商人(第1位)、小間物商(第6位)、本屋(第13位)という商業従事者、食料品商(第3位)、居酒屋(第7位)、煙草屋(第12位)という食料品業者、および薬屋(第10位)、薬種商(第13位)という専門職で約3分の2を占め、金細工師(第2位)および絹織布工(第5位)が上位を占めているのである。

表4 シティにおける上位13職⁽¹⁰⁾
(1666年, 20教区)

商人	Merchant	125
金細工師	Goldsmith	79
食料品商	Victualler	71
製靴工	Shoemaker	58
絹織布工	Silkman	48
小間物商	Haberdasher	45
居酒屋	Alehousekeeper	44
桶屋	Cooper	43
荷担ぎ	Porter	34
薬屋	Druggist	27
指物師	Joiner	26
煙草屋	Tobacconist	26
薬種商	Apothecary	25
本屋	Bookseller	25

(8) 戸主の職業が明記されている報告書は、以下の20教区のみに関するものであるが、そのうち12教区は St. Mary le Bow 教区近辺に集中しており、むしろシティの職業構造の特質を良く示すサンプルといえよう。すなわち、Allhallows Honey Lane, Allhallows Steyning, Antholin, Benet Sherehog, Botolph Aldersgate, Katherine Coleman, Gabriel Fenchurch, John the Baptist, Magnus Fish Street, Margaret New Fish Street, Martin, Martin Ironmonger Lane, Martin-le-Grand, Mary Bothaw, Mary Bow, Mary Woolnoth, Michael Royal, Pancras, Stephen Walbrook, Swithen の20教区である。また、職業分類に関しては、多くの困難が伴うとともに、したがって研究者によって様々であるが、本稿ではロンドン各地域の比較のために、出来るだけバウア博士のそれに従うことにする。

(9) Power (1986), pp. 212-21.

(10) 表3より作成。

表 5 1866年のロンドンにおける職業集団集別住度⁽¹¹⁾

教区名	平均 戸数	商品ないしサービス販売業				工業						半熟練職						
		商業従事者		食品業者		専門職		木工業		金属加工業		繊維衣類製造業		皮革工業		雑工業		
		平均	標準	平均	標準	平均	標準	平均	標準	平均	標準	平均	標準	平均	標準	平均	標準	
Stephen Walbrook	6.5	2.3	0.5	3.4	0.7	—	0.1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Mary Bothaw	5.9	1.7	0.4	2.0	0.8	0.2	1.0	0.5	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.4	0.6
Antholin	5.8	1.1	0.8	1.6	0.5	0.3	1.2	1.0	1.1	1.1	1.1	1.1	1.1	1.1	1.1	1.1	1.1	0.4
Allhallows Honey Lane	5.7	1.1	1.2	0.8	—	—	3.1	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Gabriel Fenchurch	5.6	1.3	0.7	0.6	1.2	0.6	0.8	0.7	—	—	—	—	—	—	—	—	—	4.9
Pancras	5.5	1.8	1.5	0.8	0.5	—	0.8	0.6	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0.7
Martin Ironmonger Lane	5.5	1.5	0.7	2.6	1.6	0.5	0.9	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
Mary Woolnoth	5.5	1.0	0.9	1.5	0.8	2.6	0.5	0.3	—	—	—	—	—	—	—	—	—	1.1
Mary Bow	5.3	1.8	0.8	1.1	0.5	—	1.4	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	0.8
Swithen	5.2	1.3	0.8	0.7	1.7	0.5	1.4	0.3	0.7	1.4	0.7	1.4	0.3	0.7	1.4	0.7	1.4	0.6
Botolph Aldersgate	5.1	1.0	1.0	1.0	0.4	1.0	0.7	1.1	1.1	2.0	2.0	2.0	1.1	2.0	1.5	1.5	1.5	1.1
Benet Sherehog	5.1	1.3	1.4	3.2	1.5	0.7	0.2	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
John the Baptist	4.7	0.7	1.1	0.7	1.7	0.7	1.7	0.3	0.3	1.2	1.2	1.2	0.3	1.2	1.6	1.6	1.6	0.4
Magnus Fish St.	4.6	1.3	2.0	0.6	0.4	0.1	1.2	0.7	0.4	0.4	0.4	0.4	0.7	0.4	0.4	0.4	0.4	0.6
Allhallows Steyning	4.5	0.7	0.9	0.7	2.3	0.5	1.5	1.1	1.1	0.2	0.2	0.2	1.1	0.2	1.4	1.4	1.4	1.7
Martin	4.4	0.5	0.8	0.7	0.5	3.7	0.2	1.1	1.1	1.7	1.7	1.7	1.1	1.7	1.1	1.1	1.1	—
Margaret New Fish St.	4.4	0.6	1.5	1.2	1.9	0.9	0.5	0.6	0.6	0.3	0.3	0.3	0.6	0.3	1.3	1.3	1.3	2.2
Katherine Coleman	4.2	0.7	1.1	0.8	2.6	0.5	1.1	0.9	0.4	0.4	0.4	0.4	0.9	0.4	1.0	1.0	1.0	3.0
Michael Royal	3.6	0.8	1.5	0.3	3.2	0.3	1.2	—	—	—	—	—	—	—	1.7	1.7	1.7	0.8
Martin-le-Grand	3.4	0.3	1.0	0.2	0.3	0.5	2.1	4.4	2.3	2.3	2.3	2.3	4.4	2.3	0.3	0.3	0.3	0.4

(11) Power (1986), p. 217, Table 28.

さらに、表5よりシティにおける職業分布を詳細に知ることができる。すなわち、商人や専門職は、市の富裕な中心地に集中している(各々集中度の高い3教区は、前者 St. Stephen Walbrook, St. Pancras, St. Mary Bow 教区、後者 ST. Stephen Walbrook, St. Benet Shere hog, St. Martin Ironmonger Lane 教区である)のに対して、食料品業者は、その性格上、すなわち商品の供給源もその市場もテムズ河畔にあったから、テムズ河畔の比較的貧しい教区 (ST. Magus Fish Street, St. Pancras, St. Margaret New Fish Street, St. Michael Royal という4教区) に集中する傾向を示している(但し、その集中度は上記2職より低い)。また、工業職について、織物・皮革工業は少ないものの、後者は St. Martin-le-Grand 教区に極めて高い集中を示しており、Allhallows Honey Lane 教区に高い集中度を示す前者は、すべて絹織布工であった。また、金属加工業も、2教区 (St. Mary Woolnoth および St. Martin 教区) に高い集中度を示すが、その理由は、皮革とともに環境汚染をひきおこしがらだつたからであることがパウアー博士によって示唆されている。また、極めて興味深いのは、もっとひどく嫌われた皮革業や明礬製造業は、これらシティの教区からはまったく追い出され郊外におしやられていることである。⁽¹²⁾

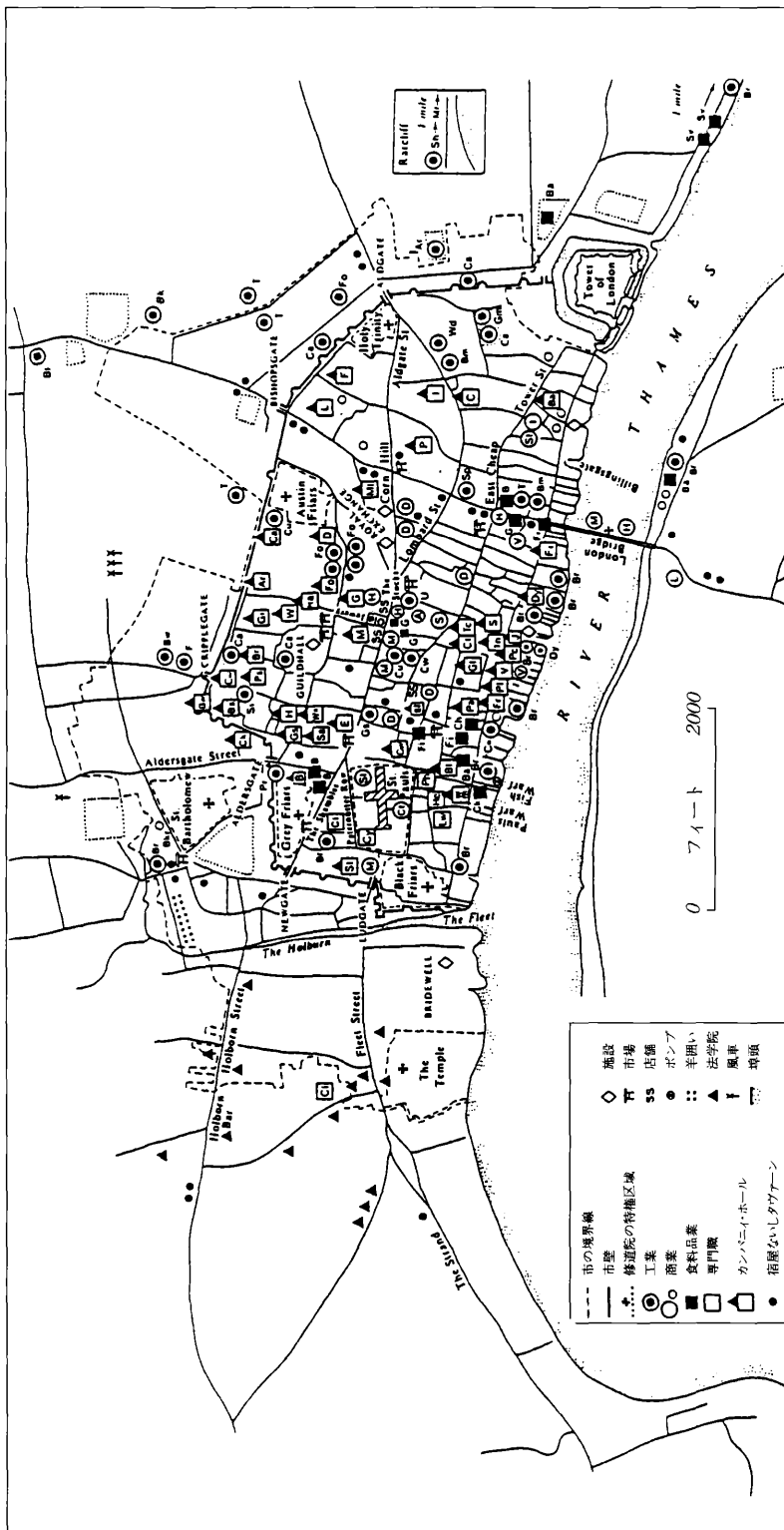
ii 以上が、1666年の炉税報告書の分析から知られるシティの職業構造の特徴であるが、パウアー博士によれば、中世のロンドンにおいては、ヴァンスの指摘する職業別の住み分けがみられたのであり、その職業別住み分けの伝統は、1666年にもなお十分に生きていたように思われるとされる。⁽¹³⁾そして、16世紀末におけるそうした伝統の残存とその分散過程の状況については、ストウの記述を通じてかなり知ることができる。⁽¹⁴⁾

すなわち、ストウの主要な関心は建築物にあったが、商工業、社会および16世紀のロンドンの成長と発展についてもかなりの記述がなされており、46のカンパニー・ホールおよび9の市場につい

(12) Power (1986), pp. 216-8.

(13) Vance (1971); Power (1986), p. 216.

(14) ジョン・ストウ (Stow, J.) は、1525年に獣脂蠟燭商の子供として生まれ、市東部オールドゲイト (Aldgate) で仕立商として営業を行い、1570年代にオールドゲイト通り (Aldgate street) の別の家に引っ越して以来学者の道を歩み始め、当初は国家の歴史を勉強していたが、晩年に地方史、特に自分の生まれ育ったロンドン史に転じ、1598年にイギリスにおける最初の都市の地方史となる極めて詳細な『ロンドンの調査』(Stow 1603/1971) を著したのであり、これと比肩できるのは、ジョン・フッカー (Hooker, J.) による『エクセター史』(Hooker 1765) のみといわれる。尚、ストウの書はこれまでに諸版が刊行されているが、ケンブリッジ大学のドブソン教授およびロンドン大学のハーディング博士によれば、Kingsford 版が最良とのことである。また、ストウの記述の殆どはロンドン市内にあてられ(各市区に1章があてられ、全体の約4/5の300頁を占める)、郊外およびウェストミンスターについての記述は少ない(僅か3章、全部で55頁にすぎない)が、サザークについては市区の1つ (Bridge Without 区) として扱われている。Power (1985), pp. 1-5; 17-8, n. 2; Harding (1995), p. 36; 酒田 (1992c/94), 109頁; (1993a), 21頁, 註12。



- 職業略記**
- A 薬師商
 - A 武器師
 - B 肉屋
 - Ba パン屋
 - Bk 煉瓦製造工
 - Bkr 借賃人
 - Bl 染布屋
 - Bm 織製道具工
 - Bs 織製業者
 - Bw 弓師
 - C 織物社工
 - Ca 大工
 - Cl 裁記
 - Ch チーズ店
 - Ck 料理師
 - Cm 粉屋
 - Ct 刃物師
 - Cu 製革工
 - Cw 製靴工
 - Cy 聖職者
 - D 兵隊商
 - Dy 染色工
 - E 製鐵工
 - F 矢師
 - Fv 魚商
 - Fr 菓実商
 - G 食料品商
 - G 製糖工
 - Bowyers
 - Clothworkers
 - Carpenters
 - Clerks
 - Cheesemongers
 - Cooks
 - Corin Millers
 - Corn Millers
 - Cutlers
 - Carriers
 - Cordwainers
 - Drapers
 - Dyers
 - Embroiderers
 - Fletcher
 - Fishmongers
 - Founders
 - Fruiters
 - Grocers
 - Girdlers
 - Glaziers
 - Glassmakers
 - Goldsmiths
 - Hobblers
 - Heralds
 - Ironmongers
 - Inholders
 - Joiners
 - Leathersellers
 - Lawyers
 - Mercers
 - Masons
 - Marners
 - Merchant Tailors
 - Pewterers
 - Painter Stainers
 - Parish Clerks
 - Physicians
 - Plumbers
 - Printers
 - M 高級織物商
 - Ma 石工
 - Mr 大工
 - Mr 仕立商
 - P 白織物師
 - Pe へんき屋
 - Pa 印刷屋
 - Pc 教区書記
 - Ph 内科医
 - Ph 製糖工
 - Pi 鉛筆工
 - Pr 印刷屋
 - Plasterers
 - Skinner
 - Saddlers
 - Shippers
 - Shipwrights
 - Silversmiths
 - Smiths
 - Salter
 - Sparriers
 - Stationers
 - Viewers
 - Wiredrawers
 - Woodmongers
 - Wax Chandlers
- 施設**
 市場
 店舗
 ボンブ
 羊飼い
 法学院
 鐘車
 塔頭
- 市の境界線**
 市壁
 修道院の特権区域
 工業
 商業
 食料品業
 専門職
 キャンパニーホール
 宿屋ないしタヴァナーン
- 職業略記**
 T 張師
 Tc 鞣革職商
 U 家具屋
 V 鞣革商
 W 織布工
 Wd 針織製造工
 Wm 材木商
 Wx 蠟燭商
- 職業略記**
 Ps 左官屋
 S 毛皮商
 Sa 鞍師
 Sh 鞍大工
 Si 製細工師
 Sl 塩商
 Sp 掛製道具工
 St 織物職商
 Sv 水牛明骨具出番
 Sailors' Victuallers
- 0 71-00 2000
- 1 mile

図2 ストウによって記述されたロンドンの商工業 (16)

でもすべて述べられているのである。⁽¹⁵⁾そして、パウアー博士は、ストウの商工業に関する記述のある地点について、興味深い地図(図2)を作成しているのである。

図2から直ちに受ける印象は、商工業活動が市壁内に極めて集中していることである。まず、料理師のホールを除くすべてのカンパニー・ホールが、市壁内の中心地域に位置している。すなわち、22ホールがチープ(Cheap)の北側に、そして18ホールがチープの南側、特にテムズ川の近くに位置している。商業職のホールと工業職のホールが混在しているが、それは、おそらく市壁内の世界が物理的に狭かったからで、市壁内のどこに住んでもホールから遠くなることはなかったからである。また、市場も、ロンドンがすでに東西に1マイルずつ、すなわち東はラトクリフ(Ratcliff)、西はウェストミンスター(Westminster)まで拡大していたにもかかわらず、ニューゲイト市門とオールドゲイト市門を結ぶチープおよびコーンヒル(Cornhill)通りにそって、ニューゲイト(Newgate)、チープ(Cheap)、ストックス(the Stocks)およびレドンホール(Leadenhall)の4食料品市場(Food market)、旧魚市場通り(Old Fish Street)とイースト・チープ(East Cheap)に2魚市場(Fish market)、ニューゲイトのシャンプルズ(the Shambles)に肉市場(meat market)、そして市庁舎(Guildhall)の近くに2織物市場(cloth market)と、屠殺が行われたスミスフィールド(Smithfield)を除き、すべて市壁内にあったのである。⁽¹⁷⁾

次に、図2にはストウによって述べられた64の職業グループが記されているが、まず商人グループについては、高級呉服商、呉服商、小間物商、毛皮商が、市の中心部、特に主要な通りであるチープおよびウオトリング通り(Watling Street)に支配的であることが注目される。これに対して市の周辺では、ラドゲイト(Ludgate)の高級呉服商とロンドン橋上の高級呉服商および小間物商を例外として殆どみられず、市壁外に現れるのは、St. Bartholomew 教会近くの仲買人とサザーク(Southwark)の皮革商のみである。次に、食料品業者は、おおよそ市場の近くに集住していた。すなわち、(1)肉屋は、ニューゲイトのシャンプルズの近辺、(2)魚商は、旧魚市場通りおよびイースト・チープの魚市場近辺、(3)食料品商はストックス市場の近くのポウルトリイ(Poultry)通りに沿って集住していた。但し、(4)パン屋は分散していた。しかし、職人グループについては、市中心部にも、例えばチープに金細工師や家具屋、ソーパー横丁(Soper Lane)に製革工や製靴工が集住していたが、市周辺に集住することがより普通であった。すなわち、(1)テムズ河畔に染色工、(2)オールドゲイズゲイト市門およびクリップルゲイト市門の近くに印刷工、銀細工師および大工、後者の市壁外に弓師および矢師が、(3)オールドゲイト市門に向かって箆製造工、針金製造工、大工およびガラス製造工、その市壁外に⁽¹⁸⁾鋳物師および大工が、集住していた。かくして、やはり一般的には、商

(15) Power (1985), pp. 3-5.

(16) Power (1985), p. 9, Figure 3.

(17) Power (1985), pp. 8, 10.

(18) Power (1985), p. 10.

人が市中心部を占め職人が市周辺部を占めていたとするヴァンス・モデルがみられた、といえるのである。

図2において、さらに注目されるのは、すでに東部市壁外（イースト・エンド）に、レンガ製造工、洗い張り場（tenter grounds）、大工、鋳物師および武器師、さらにラトクリフに船大工や水夫の集住がみられ、西部市壁外（ウェスト・エンド）に、法曹家が属する多くの法学院（Inns of Court）が存在していることであり、また宿屋が、市内に通じるストランド（Strand）、ホルボーン（Holborn）、スミスフィールド近辺、ビショップスゲイト（Bishopsgate）、オールドゲイト（Aldgate）、ロンドン橋の南のサザークの本通り（High Street）といった主要な道路に沿ってみられたことである。

かくして、ストウの記述からえられる結論として、パワー博士は次のように述べている。「それゆえ、全般的な経済像は、市の商工業活動の市壁内への極度の集中である。そして、商人・販売業者が市中心部の主要な街路を占め、職人・手工業者は市周辺部に向かってみられ、すべてが集中化せる埠頭システム（a concentrated quay system）によっていた。こうした経済活動の集中の唯一の例外は、イースト・エンドの工業、ウェスト・エンドの専門職グループ、および市周辺の宿屋であった⁽¹⁹⁾。そして、さらに続けてパワー博士は、「ストウの証拠を信ずるならば、工業の郊外への移動は、16世紀においてはまだ殆ど見られない現象であった」と述べているが、すでにみたように（前出表2参照）16世紀後半においても工業は市壁外において70%を占め、17世紀における郊外の急速な発展とともにさらにその比率を高めており、その後半にはシティ人口の減少さえみられた（前出表1参照）同世紀には、工業の郊外への移動は急速に進展したと思われる。かくして、次に16世紀末～17世紀における東西南北の各郊外地域における職業構造を検討することにしよう。

III

i 17世紀の東部郊外（イースト・エンド）の最大教区 Stepney については、同じくパワー博士が17世紀の教区簿冊を用いて行った分析によって明らかになる。同簿冊の埋葬簿から作成された表6のイースト・エンドの Stepney 教区の職業分布から、シティのそれと比較しつつ、その特徴とし

(19) Power (1985), p. 11.

(20) Power (1985), p. 11. 但し、ストウは、「この町でいろいろな仕事をし物売っている人びとは、もっとも都合の良いところを求めてしばしば居住地を変えた」として、20を越える職種の事例を挙げ、それらの集住が中世以来のものではないことを指摘しているが、分散したとされるのは、高級呉服商および小間物商、胡椒商および食料品商、葡萄酒商、料理師あるいは染料商、および弓師の5事例のみである。Stow (1603/1971), Vol. I, p. 81; Power (1985), p. 10; (1986), p. 216.

(21) Power (1971), chap. 6.; (1990), pp. 105-8. 尚、イースト・エンドは、Stepney および Whitechapel の2大教区からなる。Power (1990), p. 103. 博士論文の複写および利用を許可して下さったパワー博士に記して感謝申し上げる。

(22)
表6 17世紀ロンドンにおける職業集団

	Stepney 教区 ⁽¹⁾ 1610-90	Cripplegate 教区 ⁽²⁾ 1654-93	ロンドン ⁽³⁾ 市壁外 1601-1700	ロンドン ⁽³⁾ 市壁内 1601-1700
商品ないしサービス販売業				(%)
商業従事者 (Dealers)	2	3	2	20
食料品業者 (Victuallers)	7	9	15	10
専門職 (Professions)	<u>3</u>	<u>8</u>	<u>2</u>	<u>11</u>
小計	<u>12</u>	<u>20</u>	<u>19</u>	<u>41</u>
工業				
造船業 (Shipbuilding)	6	0	0	0
木工業 (Wood)	3	5	3	4
金属加工業 (Metal)	3	6	9	9
織物・衣類製造業 (Textiles)	17	17	24	21
皮革工業 (Leather)	3	9	10	7
雑工業 (Miscellaneous)	<u>1</u>	<u>2</u>	<u>4</u>	<u>1</u>
小計	<u>33</u>	<u>38</u>	<u>50</u>	<u>42</u>
建築業	5	6	7	6
農業	2	2	0	0
運送業				
海運業 (Marine)	35	1	0	0
陸運業 (Land)	<u>1</u>	<u>7</u>	<u>11</u>	<u>5</u>
小計	<u>36</u>	<u>8</u>	<u>11</u>	<u>5</u>
雑職業	12	26	13	6
総計	<u>100</u> (n 3087)	<u>100</u> (n 12004)	<u>100</u> (n 13660)	<u>100</u> (n 2219)

資料 (1) Stepney burial registers. 但し、各10年間の1～6月の記載が分析の対象となっている。Greater London Record Office (GLRO), P93/DUN.

(2) Forbes (1980), pp. 120-7.

(3) Beier (1986), p. 148. 但し、ロンドン市壁外には Stepney が含まれる。

て以下の点を指摘できよう。

すなわち、まず第1に、商品ないしサービス販売業という都市エリート職グループが12%と、シティ (41%) および郊外全般 (19%) と比較して、極めて少ないこと。第2に、工業グループについても33%と、シティ (42%) および郊外全般 (50%) と比較してやはり低く、また織物・衣類製造業は通常どの地域においても高い比率を示すが、ここでは造船業が6%を占めていること (他は0%)。他方、金属加工業および皮革工業は、各々3%と他より少ないこと。第3に、何よりも顕著な

(22) Power (1990), p. 105, Table 7.1. 尚、埋葬簿には、女性や徒弟のような若者の職業については記載されておらず、青年男子のそれに偏っている。ibid., p. 106.

表7 Stepney 教区における上位7職
(1606-10年)⁽²³⁾

		(人)
水夫	Mariner	320
船大工	Shipwright	51
仕立屋	Tailor	36
製靴工	Shoemaker	36
大工	Carpenter	29
織布工	Weaver	37
蹄鉄工	Smith	15

のは、運送業が36%、特に海運業（水夫）が35%と極めて高い比率を占めていることである。

上記の特徴は、1606-10年の教区簿冊の洗礼簿に記載された洗礼受拝者の父親の職業の上位7職をあげた表7に端的に示されているといえよう。すなわち、商品ないしサービス販売業がひとつも現れないのに対して、水夫が320名と圧倒的な数で第1位を、次いで船大工が51名で第2位を占めているのである。かくして、パウアー博士は、17世紀のイースト・エンドがプリマス (Plymouth) やポーツマス (Portsmouth) のような海港都市という特化の特徴を示すと結論している⁽²⁴⁾のである。

ii 17世紀前半の南部郊外サザークについては、ボウルトン博士の注目すべき研究によって、St. Saviour および St. Olave 両教区の職業構造が明らかに⁽²⁵⁾されている。

すなわち、前者については教区簿冊の洗礼簿に記載された父親の職業、後者については埋葬簿に記載された本人の職業より、さらに前者のバラサイド地区 (Boroughside district) については1622年の聖餐受拝者名簿 (the sacramental token book) にリスト・アップされた世帯主の職業を上記教区簿冊の洗礼簿ほかマナ史料や遺言状により明らかにすることによって、各々の地域の職業構造が明らかにされているのである。

ここではサザークの中心部分を占める St. Saviour 教区のそれを、パウアー博士の分類に従って作成した表8によって、上述のシティおよびイースト・エンドと比較しつつみるならば、その特徴として以下の3点を指摘できよう。すなわち、まず第1に、食料品業者が17.8%と極めて高い比率を占めていること、第2に工業、特に皮革工業が8.8%と高い比率を示していること、そして第3に運送業、特に海運業が23.9%と極めて高い比率を示していること、以上である。

上記の特徴は、さらに同教区をバラサイド地区とクリンクおよびパリ・ガーデン両特権地域 (Clink and Paris Garden Liberties) とに分けて各々上位12職を挙げた表9によって、端的に示されていると

(23) Power (1971), p. 176より作成。

(24) Power (1990), p. 106.

(25) Boulton (1987), pp. 65-73.

表 8 St Savior 教区における職業集団

(1618-25年)⁽²⁶⁾

	(人)	(%)
商品ないしサービス販売業		
商業従事者 (Dealers)	75	4.0
食料品業者 (Victuallers)	331	17.8
専門職 (Professions)	77	4.1
小計	483	26.0
工業		
造船業 (Shipbuilding)	20	1.1
木工業 (Wood)	51	2.7
金属加工業 (Metal)	83	4.5
織物・衣類製造業 (Textiles)	267	14.3
皮革工業 (Leather)	163	8.8
雑工業 (Miscellaneous)	74	4.0
小計	658	35.4
建築業	61	3.3
農業	28	1.5
運送業		
海運業 (Marine)	444	23.9
陸運業 (Land)	169	9.1
小計	613	33.0
雑職業	17	0.9
総計	1860	100.0

いえよう。すなわち、前者は、イングランド南部から市内に通じるバラ本通り (the Borough High Street) が貫通し、サザーク市 (Southwark market) がこの通りで週4日開かれていた重要なビジネス・取引センター (an important business and trading centre) であり、後者は、各々3千名を収容したといわれるスワン座およびグローブ座といった劇場や熊公園があった極楽センターであったことを反映して、前者においては、食料品業者が半数(特に肉屋が第2位)を占め、後者においては、船頭が圧倒的多数を占めているのである。船頭は、殆ど後者の娯楽センターにシティおよびウェスト・エンドの顧客を運ぶ渡し船に従事していたのであり、かれらは1593年に疫病対策の一貫として一時

(26) Boulton (1987), p. 66, Table 3. 3, pp. 67-8, n. 25, p. 69, n. 28 より作成。

(27) Boulton (1987), p. 66, Table 3. 3, pp. 67-8, n. 25, p. 69, n. 28 より作成。

(28) Boulton (1987), pp. 62, 64, 69, 70. かくして、食品関係職 (Food and Drink) は、前者において全職業の29.7%を占めている(その内、肉屋が25.6%を占める)のに対して、後者においては12.9%を占めているにすぎない。他方、運送・非熟練部門 (Transport and unskilled labour sector) は、

表9 St Savior 教区における上位13職

(1618-25年)⁽²⁷⁾

(人)

Boroughside 地区		the Clink and Paris Garden 地区	
製靴工 (Shoemaker)	52	船頭 (Waterman)	420
肉屋 (Butcher)	50	織布工 (Weaver)	46
食料品商 (Victualler)	45	仕立屋 (Tailor)	41
仕立屋 (Tailor)	45	醸造業者 (Brewer & (奉公人を含む) Brewer's servant)	38
織布工 (Weaver)	37	蹄鉄工 (Smith)	29
醸造業者 (Brewer & (奉公人を含む) Brewer's servant)	22	食料品商 (Victualler)	26
食料品商 (Grocer)	17	手袋製造工 (Glover)	23
パン屋 (Baker)	16	皮革仕上工 (Leatherdresser)	23
手袋製造工 (Glover)	16	籠製造工 (Basketmaker)	22
蠟燭商 (Chandler)	13	荷担ぎ (Porter)	20
蹄鉄工 (Smith)	11	製靴工 (Shoemaker)	18
チーズ商 (Cheesemonger)	10	パン屋 (Baker)	15
桶屋 (Cooper)	10	蠟燭商 (Chandler)	14
指物師 (Joiner)	10		

閉鎖されたヘンズロウ劇場の早期再開を請願しており、また17世紀前半におけるいくつかの演劇カンパニーのサザークからミドルセックスへの移動がかれらに大きな打撃を与えたことも指摘されている。⁽²⁹⁾ さらに表9では、前者において製靴工が第1位を占めている他に、手袋製造工が第8位を占め、後者においては各々第11位および第7位の両職の他に、皮革仕上工が手袋製造工と同数で第7位を占めており、サザークがロンドン皮革工業の重要な中心地であったことをよく示しているの⁽³⁰⁾である。

iii 17世紀後半における北部郊外の St. Giles without Cripplegate 教区については、フォーブス博士が教区簿冊の埋葬簿を用いた研究によって明らかになる。⁽³¹⁾

パウアー博士がフォーブス博士の研究を用いて自らの職業分類に従って作成した前出の表6、および筆者が作成した100名以上を数える上位18職を示す表10からは、その職業構造の特徴として以下

、前者の10.7%に対して、後者においては46.7%、船頭だけで39.8%を占めているのであり、サザーク内部においても大きな地域的相違を示しているのである。ibid., p. 69.

(29) Boulton (1987), p. 70.

(30) 皮革工業についても、前者において12.2%を占めたのに対して、後者においては6.8%と、地域的相違がみられるのであるが、後者においては、エドワード4世以来市内で禁止された皮革仕上職および水と水運が必要であった皮鞣職が各々同職の32%および8%を占め、前者においては、陸運と関係する鞍師職が同職の10%を占めていた。Boulton (1987), p. 70.

(31) Forbes (1980), pp. 119-32.

表10 St. Giles without Cripplegate 教区における上位18職
(1654-93年)⁽³²⁾

	親方	奉公人	計
織布工 (Weaver)	864	132	996
日雇労働者 (Labourer)	740	1	741
ジェントルマン (Gentleman)	623	18	641
製靴工 (Cordwainer)	567	16	583
仕立屋 (Tailor)	547	19	566
荷担ぎ (Porter)	476	3	479
食料品商 (Victualler)	402	23	425
手袋製造工 (Glover)	333	38	371
大工 (Carpenter)	247	16	363
兵士 (Soldier)	224	—	224
蹄鉄工 (Smith)	176	16	192
煉瓦積工 (Bricklayer)	155	5	160
針金製造工 (Wiredrawer)	150	9	159
指物師 (Joiner)	139	18	157
桶屋 (Cooper)	135	16	151
肉屋 (Butcher)	132	14	146
車力 (Carter)	130	4	134
毛織物仕上工 (Clothworker)	110	1	111

の点を指摘できよう。すなわち、まず第1に、織布工(第1位)および仕立工(第5位)に代表される織物・衣類製造業(毛織物仕上工も第18位に現れている他、染色工も13名で第20位を占めている)が17%と雑職業を除いて最大の比率を占めている他、製靴工(第4位)および手袋製造工(第8位)に代表される皮革工業も9%と高い比率を占め、さらに蹄鉄工(第11位)、針金製造工(第13位)および指物師(第14位)、桶屋(第15位)に各々代表される金属加工業および木工業も各々6%および5%を占め、工業職全体で38%と、何よりも当該地域が織物・皮革工業を中心とするかなりの工業地域であったことを示していること。⁽³³⁾第2に、大北部道路(the Great Northern Road)に近いというその立地からして、既にみたイースト・エンドのStepney教区やサザークのSt. Saviour教区と異なり、荷担ぎ(第6位)、車力(第17位)に代表される陸上運送が8%を占める運送業の大部分を占めている他、⁽³⁴⁾雑職業の比率を高めている日雇労働者(第2位)の多くも陸上運送に従事したと思われること。第3

(32) Forbes (1980), pp. 120-26, Table 1 より作成。

(33) 特定市区および教区への職業の集中傾向を指摘するフォーブズ博士の当該教区における織物・衣類製造業および皮革工業の重視は、「織布工と製靴工」という論文の表題によく示されているといえよう。Forbes (1980), p. 128.

(34) もちろん日雇労働者の多くは、大工(第9位)、煉瓦積工(第12位)に代表される建築業にも従事したと思われる。日雇労働者とならぶ当時の賃金労働者の具体的存在形態であった奉公人も、表10のよりに多数現れる他、奉公人としてのみ記載される者が314名、そして何よりも醸造業者(95名で第ノ

に、専門職が全職業の8%という高い比率を占めているが、これは主として623名もの多くを数えるジェントルマン（第3位）の存在によるものである。後でみるように、ジェントルマンの集住は17世紀ウェスト・エンドにおける大きな特徴となるが、市庁舎（Guildhall）に近く早くから発展し、また1666年の大火を免れた当該地域にも多くのジェントルマンが集住したのであった。⁽³⁵⁾

iv 17世紀の西部郊外（ウェスト・エンド）における職業構造にかんしては、以上にみた他の郊外についてと同様の詳細な研究はないが、ストウの記述によって（図3参照）、すでに16世紀末においてウェスト・エンドのホルボーン（Holborn）および特にストランド（Strand）通りには、貴族およびジェントルマンの邸宅が立ち並んでいたことが判明する。例えば、後者はバーリィ卿（Lord Burghley）、セシル卿（Sir Robert Cecil）、ベッドフォード伯（the Earl of Bedford）および大法官（the Lord Chacellor）⁽³⁷⁾等の大邸宅によって占められていたのである。さらに図3からは、チャンセリィ横丁（Chancery Lane）周辺における専門職（主として法曹家）の集中も注目される。

また、L.ストーン教授の研究が、17世紀における貴族・ジェントリという地主および専門職のウェスト・エンドへの集住を明らかにしている。すなわち、1632年の調査（農村への帰郷を命じた布告につづく調査）によれば、ロンドンに住む貴族は37名（全体の4分の1）、バロネットおよびナイトは147名（同6分の1）、エスクワイアおよびジェントルマンは130名（同10分の1以下）であるが、ナイト以上の184名のうち3分の1の61名が旧シティ内に住んでいたのみであり、貴族・地主層のロンドンへのラッシュが起こった1660年の王政復古以降1695年までには、エスクワイア以上の者でシティ内に留まった者は一部の市参事会員や商人ナイトを除いて殆どおらず、貴族はすべて西部郊外に移ってしまったという⁽³⁸⁾。そして、専門職がそれに続いたことが示唆され、ジェントルマンの地位を求めた専門職にとって貴族・ジェントリと同じ地域に住むことがそれゆえに特に重要であったことが指摘されているのである⁽³⁹⁾。

また、1677年の約2千名のロンドン商人および金融業者の住所録（Directories）によれば、そのう

ゝ 19位を占める)の奉公人として624名もの極めて多数が記載されていることが注目されるが、何故に醸造業者に奉公人がこれほどまでに多いのか、特により年輩と思われる親方の6.5倍を数えるその多さ(他の職業の場合、親方と奉公人の埋葬比は6:1から35:1である)は、大規模醸造所の存在を窺わせるが、その確かな理由はなお不明である。Forbes(1980), p. 127. 尚、醸造業の立地要因としては、市壁外においては大量の水および薪の供給が容易であったことが指摘されている。Ibid.

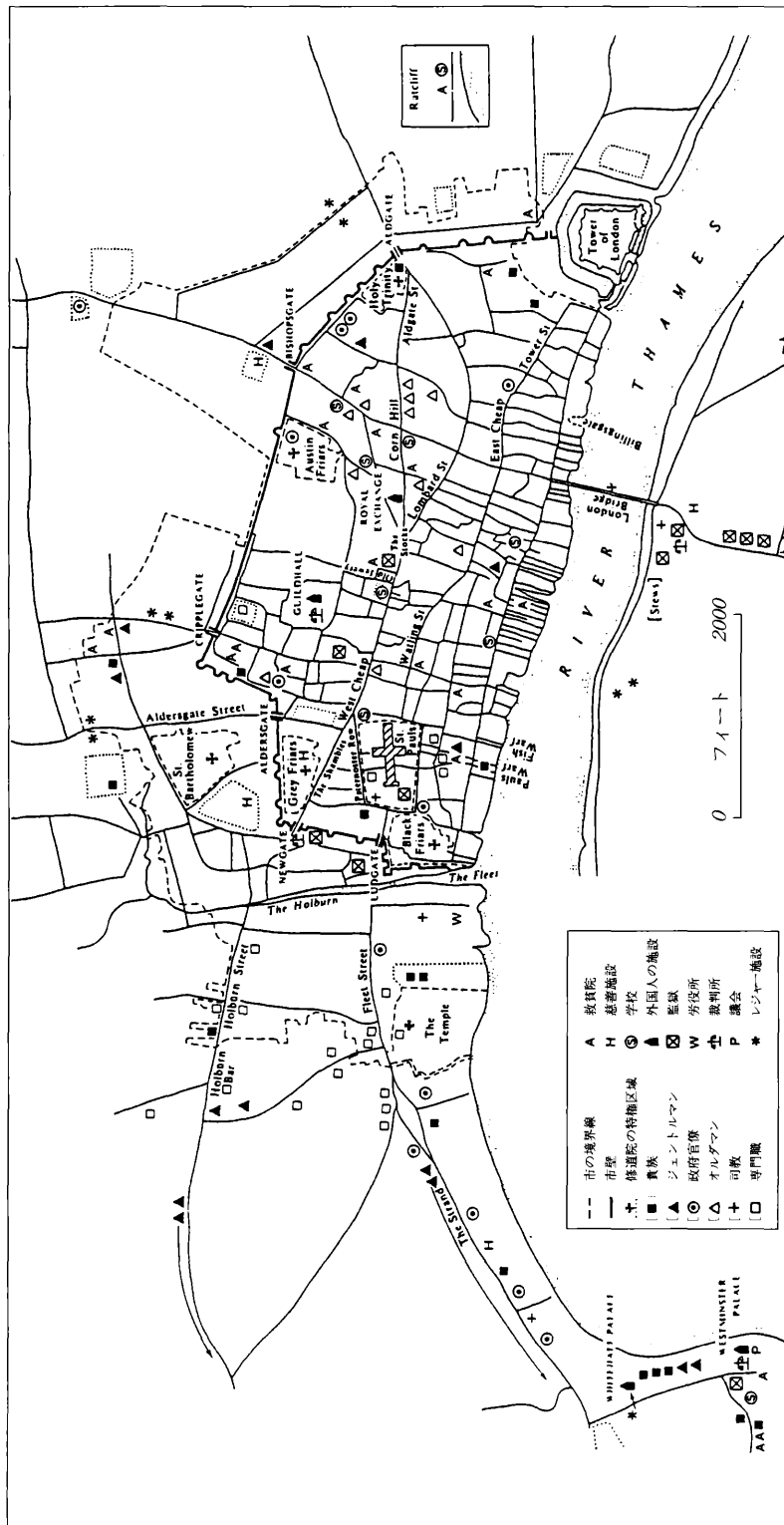
(35) J. ストウによれば、16世紀末の Cripplegate outside the Walls 市区には、既に1800もの世帯が住んでいたものであり、ドブソン博士によれば市の北・西部は、シティの5分の4を消失させた1666年の大火を免れたのである。Power (1985), pp. 2-3; 酒田 (1992c/94), 109頁。

(36) Power (1985), p. 12, Figure 4.

(37) Power (1985), p. 11.

(38) Stone (1980), pp. 175-6, 187.

(39) Stone (1980), p. 176-7.



(36) 図3 ストウによって記述されたロンドンの郵便および社会施設

ちウェスト・エンドに住む者はわずか4%にすぎなかったものであり、ロンドン商人は、けっして貴族・地主層とともにシティからウェスト・エンドに移ったりせず、シティに留まったといわれ、そのことはウェスト・エンドの幾つかの地区について残存する地代・家賃の記録からも支持される⁽⁴⁰⁾という。

このような貴族・ジェントリや疑似ジェントリの専門職のウェスト・エンドへの集中は、現在筆者が調査中の当該地域の1教区 St. Dunstan in the West の教区簿冊からも確認できるのであり、まずは多くの職業記載がなされている16世紀末~17世紀初めの洗礼簿を用いて上述の他の郊外地域についてと同様の分析を行ってみよう。⁽⁴¹⁾

表11 St. Dunstan's in the West 教区における職業集団⁽⁴²⁾
(1586-1610年)

	(人)	(%)
商品ないしサービス販売業		
商業従事者(Dealers)	308	17.3
食料品業者(Victuallers)	164	9.2
専門職(Professions)	416	23.4
小計	888	49.9
工業		
造船業(Shipbuilding)	0	0
木工業(Wood)	18	1.0
金属加工業(Metal)	131	7.4
織物・衣類製造業(Textiles)	359	20.2
皮革工業(Leather)	199	11.2
雑工業(Miscellaneous)	31	1.7
小計	738	41.5
建築業	63	3.5
農業	2	0.1
運送業		
海運業(Marine)	19	1.1
陸運業(Land)	15	0.8
小計	34	1.9
雑職業(Miscellaneous)	55	3.1
総計	1780	100.0

(40) Stone (1980), p. 187.

(41) Parish Register of St. Dunstan in the West, Baptisms 1558-1631, Guildhall Library, M. S. 10342. 当該教区簿冊の利用およびマイクロ・フィルム複写を許可し、便宜を計って下さったギルドホール図書館の Assistant Archivist の Ms. Charlie Turpie に記してお礼申し上げる。尚、同マイクロ・フ

表12 St. Dunstan in the West 教区における上位10職

(1586-1610年)⁽⁴³⁾

(人)

仕立屋 (Tailor)	290
ジェントルマン (Gentleman)	232
(エスクワイアを含む) (inc. Esquire)	(245)
製靴工 (Shoemaker)	111
刃物師 (Cutler)	88
公証人 (Scrivener)	76
仕立商 (Merchant tailor)	73
鞍師 (Sadler)	58
書籍文具商 (Stationer)	55
料理師 (Cook)	50
食料品商 (Grocer)	40

表11および表12から明らかとなるのは、以下の3点である。すなわち、まず第1に商業、食料品業および専門職グループが、半分の49.9%とシティよりも高い比率を占めていることである。これは、特に専門職が23.4%とシティの2倍以上の高い比率を占めていることによるが、ここには232名のジェントルマン(第2位)と13名のエスクワイアが含まれているのであり、この点が何よりも顕著な特徴といえよう。また、雑職業にリンカン法学院の執事(a butler of the Licoln's Inn)およびクリフォード法学院の執事(a butler of the Cliffordes Inn)が現れるが、同法学院の存在に関連する公証人(第5位)および書籍文具商(第8位)が上位を占めていることも他にはみられない当該地域の第2の特徴といえよう。第3に、工業職もまたシティと同様に41.5%と高い比率を占めており、特に織物・衣類製造業が20.2%とその半分近くを占めているが、これは主として合わせて290名の多くを数える仕立屋(第1位)の存在によるものであり、これも上記のジェントリ・専門職の需要によるものと考えられる。皮革工業(11.2%)および金属加工業(7.4%)の多さも注目されるが、各々主として製靴工(第3位, 111名)および鞍師(第7位, 58名)、刃物師(第4位, 88名)および金細工師(16名)によるもので、雑工業職の時計製造工および楽器製造工(各々8名および13名)、雑職業の楽師(16名)、食品関係職の料理師(第10位, 50名)と、他の地域ではあまり現れない職業の存在とともに、同じく上記の需要によるものといえよう。かくして、ウェスト・エンドの職業構造は、商業と専門職

、イルムは、Salt Lake CityのChurch of Jesus Christ of Latter Day SaintsのFamily History Departmentにあり、同図書館の許可をえてそのコピーを入手することができる。

(42) Parish Register of St. Dunstan in the West, Baptisms 1558-1631, Guildhall Library, M. S. 10342より作成。

(43) Parish Register of St. Dunstan in the West, Baptisms 1558-1631, Guildhall Library, M. S. 10342より作成。

において対照的であるとはいえ、他の郊外地域よりもはるかにシティのそれに近い特徴を示すといえよう。

結びにかえて

以上より、近世ロンドンのシティおよびその郊外は、各々多様な職業を含み、かくしてそれなりにかなり自立的な経済構造を有していたといえるが、各地域は、また商業・金融中心地としてのシティ、海運・造船中心地としての東部郊外（イースト・エンド）、レジャー・飲食サービス中心地としての南部郊外（サザーク）、工業中心地としての北部郊外、そして衛示的消費中心地としての西部郊外（ウェスト・エンド）という経済特化を示しており、かくして近世ロンドンとは、5つの経済的に特化した地域（各々独自の近世都市とよべる）からなる複合都市であったといえるのではあるまいか。⁽⁴⁴⁾

[付記]

本稿は、1996年11月1日に東北大学で開かれた第11回「イギリス都市・村落共同体研究会」および同年11月30日に東京大学で開かれた第6回「地域工業化研究会」における報告に加筆したものであり、その要旨は、1997年5月31日に東北大学で開かれた社会経済史学会第66回全国大会におけるパネル・ディスカッションにおいて報告された。その際、特に貴重なコメントを頂いた上記研究会の会員の方々に記して厚くお礼申し上げる。また本稿は、1996-7年度慶應義塾学事振興資金による研究補助（個人研究）の成果の一部である。

（経済学部教授）

文 献 目 録

未刊行史料

Guildhall Library, MS10342, Parish Register of St. Dunstan in the West, Baptisms 1558-1631.

Greater London Record Office, P 93/DUN, Parish Register of St. Dustan, Stepney, Burials 1568-1622.

参 考 文 献

Alexander, J. (1989). 'The Economic Structure of the City of London at the End of the Seventeenth Century' *Urban History Yearbook 1989*.

Beier, A. L. (1986). 'Engine of Manufacture : the Trade of London' in Beier & Finlay (1986).

(44) P. クラーク、P. スラックそしてP. コーフィールドによれば、16-17世紀に新都市として現れた「工業都市 (industrial centres)」、*「鉱泉都市」* (spa towns) および「造船都市」 (dockyard towns) は、18世紀イングランドにおける主要な地方都市類型となるのである。Clark & Slack (1976), chap. 3; Corfield (1982), chaps. 2-4.

- Beier, A. L. and Finlay, R., eds. (1986). *London 1500-1700 : The Making of the Metropolis* (London) ; 川北稔訳『メトロポリス・ロンドンの成立 1500年から1700年まで』(三嶺書房, 1992年).
- Boulton, J. (1987). *Neighbourhood and Society ; A London Suburb in the Seventeenth Century* (Cambridge).
- Brett-James, N. G. (1935). *The Growth of Stuart London* (London).
- Corfield, P. J. (1982). *The Impact of English Towns 1700-1800* (Oxford) ; 坂巻清・松塚俊三訳『イギリス都市の衝撃 1700-1800年』(三嶺書房, 1989年).
- Clark, P. and Slack, P. (1976). *English Towns in Transition 1500-1700* (Oxford) ; 酒田利夫訳『変貌するイングランド都市 1500-1700年——都市のタイプとダイナミックス——』(三嶺書房, 1989年).
- De Vries, J. (1984). *European Urbanization 1500-1800* (Cambridge, Mass.).
- Finlay, R. (1981). *Population and Metropolis : The Demography of London 1580-1650* (Cambridge).
- Finlay, R. and Shearer, B. (1986). 'Population Growth and Suburban Expansion', in Beier & Finlay (1986).
- Fisher, F. J. (1948/90). 'The Development of London as a Centre of Conspicuous Consumption in the 16th and 17th Centuries', *Trans. R. H. Soc.*, 4th ser., XXX ; later in Fisher (1990) ; 浅田実訳『16・17世紀の衛示的消費の中心地ロンドンの発達』(同編『16・17世紀の英国経済』未来社, 1971年所収).
- (1971/90). 'London as an "Engine of Economic Growth"', Bromley, J. S. and Kossman, E. F., (eds.), *Britain and Netherlands, IV* (The Hague) ; later in Fisher (1990)
- (1990). *London and the English Economy, 1500-1700* (London).
- Forbes, T. R. (1980). 'Weaver and Cordwainer : Occupations in the Parish of St. Giles without Cripplegate, London, in 1654-93 and 1729-43', *Guildhall Studies in London History*, 4.
- Harding, V. (1990). 'The Population of London, 1550-1700 : A Review of the Published Evidence', *The London Journal*, Vol. 15, No.2.
- (1995). 'Early Modern London 1550-1700', *The London Journal*, Vol. 20, No. 2.
- Hooker, J. (1765). *The Antique Description and Account of the City of Exeter*, 3 Parts, ed. by Brice, A.).
- Jones, E. (1980). 'London in the Early Seventeenth Century : An Ecological Approach', *The London Journal*, Vol. 6, No. 2.
- Keene, D. and Corfield, P., eds. (1990). *Work in Towns 850-1850* (Leicester).
- Malament, B. C., ed. (1980). *After the Reformation* (Manchester).
- Power, M. J. (1971). 'The Urban Development of East London, 1550-1700' (London University Ph. D. thesis)
- (1985). 'John Stow and his London', *Journal of Historical Geography*, Vol. II, No. 1
- (1986). 'The Social Topography of Restoration London', in Beier & Finlay (1986).
- (1990). 'The East London Working Community in the Seventeenth Century', in Keene & Corfield (1990).
- Stone, L. (1980). 'The Residential Development of the West End of London in the Seventeenth Century', in Malament (1980).
- Stow, J. (1603/1971). *A Survey of London*, ed. by C. L. Kingsford (London).
- Vance, J. E. (1971). 'Land Assignment in Pre-Capitalist, Capitalist and Post Capitalist Cities', *Economic Geography*, 47.
- Wrigley, E. A. (1967/87). 'A Simple Model of London's Importance in Changing English Society and Economy 1650-1750', *Past and Present*, 37 ; later in Wrigley (1987).
- (1985/87). 'Urban Growth and Agricultural Change : England and the Continent in the

- Early Modern Period', *Journal of Interdisciplinary History*, XV : later in Wrigley (1987).
- (1986). 'Brake or Accelerator? Urban Growth and Population Growth before the Industrial Revolution', presented to Session 5 : Agricultural Productivity, Transportation Capacity and Urban Growth : Seminar on Urbanization and Population Dynamics in History.
- (1987). *People, Cities and Wealth : The Transformation of Traditional Society* (Oxford).
- 酒田利夫(1992a/94). 「イギリス中世・近世都市史の諸問題」(社会経済史学会編『社会経済史学の諸問題』有斐閣所収) ; 後に酒田 (1994) 所収.
- (1992b/94). 「近世ロンドンにおける人口 (上), (下)」(『青山国際政経論集』24, 26号) ; 後に酒田 (1994) 所収.
- (1992c/94). 「R. B. ドブソン『中世におけるロンドン』」(『比較都市史研究』11巻2号) ; 後に酒田 (1994) 所収.
- (1993a). 「イギリスにおける地方史編集・叙述の歴史」(『歴史学研究』641号).
- (1993b/94). 「近世イギリス経済発展におけるロンドンの役割について」(『青山国際政経論集』27号) ; 後に酒田 (1994) 所収.
- (1994). 『イギリス都市史』(三嶺書房).
- (1996). 「近世ロンドンにおける疫病の流行について (上), (下)」(『青山国際政経論集』36, 37号).
- 坂巻清(1996). 「近世ロンドン史研究の成果と課題——「危機」と「安定」をめぐる研究を手がかりに——」(東北大学 Discussion Paper, No. 53).